経 済 研 究

第37巻 第1号

Jan. 1986 Vol. 37 No. 1

ヴィクトリア期イングランドの労働組合による移民

松 村 高 夫

I はじめに

本稿は，ヴィクトリア期の労働組合が推進したとされる移民が，いかなるものであったのかを明らかにするために，陶工とフリントガラス製造工の2組合のケースを具体的・歴史的に分析することを目的としている。当然，それは古典派経済学が，ヨリ一般的にはミドル・クラスの思想と学説が，労働組合の政策決定に影響を与えたか否かという周知の問題にも関連をもつことになろう。

ウェッブは，中期ヴィクトリア期イングランドの労働組合運動を主導した「新型組合」[1]'New Model Union' が，古典派経済学の需給説に，とりわけ需給説の特別のケースであるJ.S.ミルの賃金基金説に依拠して，労働供給の制限によって賃金上昇や労働条件改善を目的とする政策を立案した，と主張した。すなわち，ストライキに訴えるのではなく，徒弟規制，地域間労働移動の統制，生産規制などの方策により，熟練労働者の恒常的労働供給不足を創出し，それによって雇主にたいして「対等な」地位を確保しようとした組合と，「新型組合」を規定したのである。そして，移民はこの労働供給不足を創出する重要な方策の1つであるとした。ウェッブは，『労働組合史』のなかで，つぎのように書いている。「1845年以降，執行委員会のほとんどがストライキに断固として反抗していたという事実は，精力的な組合政策の放棄を意味していたわけではない。かなり教育程度の高い組合指導者たちは，賃金が労働者の特定の各階層における需給関係に必然的に依拠しているという経済的公理を受容していた。かれらの条件を維持ないし改善するためのなしうる唯一の手段が，供給を減少させることにあるということは，明白な結論であるように思われた」[2]。そして，1847年の鋳鉄工の代表者会議での主張と，1854年のフリントガラス製造工組合の主張とが例示されている。前者の主張は，「賃金は労働需給によって最も増加する」とし，後者は，「労働の不足は，1849年マンチェスターで開催されたわれわ

1) ウェッブの「新型組合」論，および，それにたいする批判については，松村高夫「19世紀第3四半期のイギリス労働史理解をめぐって——労働貴族論と「新型組合」論を中心にして——」(下)，(『日本労働協会雑誌』No. 225, 1977年12月号)を参照されたい。

2) S. & B. Webb, *The History of Trade Unionism*, 1920 ed., p. 201. 飯田鼎・高橋洸訳『労働組合運動の歴史』上巻，日本労働協会，1973年，228ページ(ただし，訳は筆者による)。

れの第1回会議で決定された根本原則のひとつである」としたものである。そして，この需給説の適用という点で，他に植字工，製本工，陶工，機械工も同様の見解をもったとし，「つぎの10年間，移民基金 Emigration Fund は多数の大きな組合の恒常的特徴」となったとし，「移民が労働組合政策の欠くことのできない一部として最も支持されていたのは，1850年と1860年のあいだの時期であった」[3]としている。さらにウェッブは，1860年代は移民は少しづつ続いたが，アメリカの労働組合の反対とゴールド・ラッシュの衰退により，結局放棄したと指摘する。

ウェッブの見解は，その後，S. C. ジョンスン，A. レッドフォード，C. エリックスン，W. S. シェパースン等によって支持され，強固な伝統的見解となった[4]。とくにエリックスンは，木綿，鋳鉄，機械，建築の労働組合の機関誌，規約，議事録の検討を通して，「1880年代の不況に至るまで，イングランドの労働組合は移民の効力にたいし重大な疑問をもつことはなかった。機械工，鋳鉄工，大工，フリントガラス製造工のような古くから確立した組合は，組合員の移民を奨励しつづけ，資金授助をしたり有益な情報と助言を提供したりして組合員の移民を助成しつづけた」[5]（傍点は引用者）と結論した。エリックスンの主張の前提には，当時の組合指導者たちが賃金基金説を受容し，ストライキを放棄したとする理解がある。

これに反対する見解を表明したのは，R. V. クレメンツである。かれは，「1845年と75年のあいだに，組合の構造と政策にいかなる変化が生じようとも，正統派経済学への柔順な服従という結果はほとんど生じなかった」[6]として，むしろ，この期間には，ミルの「賃金基金の概念，すなわち『需給説』の特別のばあいは，労働組合にとって敵対的であり」，「賃金基金説にかんしては，組合指導者たちは，重要な意味をもつものとしてそれを受容しはしなかった」[7]と主張する。したがって，労働組合が移民を促進したとする見解にも批判的であり，「労働組合からの（移民にたいする）援助は，しばしば，すでに移民することを決心している人たちの援助以上のものではなかった。これらの人々はかれらの組合や同僚を助けるためではなく，かれら自身のために国を離れたのであり，移民援助金も，とくに『共済機能をもつ』組合では，このような自立的個人に多少の援助をすることを目的としていた」と述べ，共済機能をもつ「ジャンタは，政策としての移民に，他のグループの労働者の指導者よりも関心が小さかった」[8]とする。すなわち，クレメンツは，「労働組合の機関誌の多くの情報は，移民に不賛成であり」，「その問題に大きな関心を示さないレンガ積み工のような組合が，外国からの（移民にかんする）好ましくない情報を印刷しただけでなく，フリントガラス製造工のような他の組合もたいへん頻繁に同様のことをして，外国の状態が移民を保障したときでさえ組合員に国内に留まるよう説得した」[9]と指摘するのである。

このように，エリックスンもクレメンツも，ともにフリントガラス製造工を例証としながら正反対の結論をだしているのだが，なぜそのようなことが生じるのだろうか。また，ヴィクトリア期の労働組合の移民は，需給説に基礎づけられて計画

3) *Ibid.*, p. 201, 訳，229ページ。

4) S. C. Johnson, *A History of Emigration from the United Kingdom to North America, 1763–1912*, 1913, pp. 80–81; Arthur Redford, *Labour Migration in England, 1800–1850*, 1926, pp. 155–56; Charlotte Erickson, "The Encouragement of Emigration by British Trade Unions, 1850–1900," *Population Studies*, III, 1949; W. S. Shepperson, "Industrial Emigration in Early Victorian Britain," *Journal of Economic History*, XIII, 1953. 高橋克嘉『イギリス労働組合主義の研究』1984年，日本評論社，第4章「労働組合主義と世界市場」の第1節は，19世紀の移民を国際労働移動として捉え分析した優れた論稿であるが，労働組合が推進した移民については，わずかしか書かれておらず，それもウェッブの見解を紹介したものである（p. 349）。

5) Erickson, "The Encouragement of Emigration," p. 250.

6) R. V. Clements, "British Trade Unions and Popular Political Economy, 1850–1875," *Economic History Review*, sec. ser., XVI, 1961, p. 104.

7) *Ibid.*, p. 94.

8) R. V. Clements, "Trade Unions and Emigration, 1840–80," *Population Studies*, IX, 1955, p. 180.

9) *Ibid.*, p. 170.

され実施されたのだろうか。以下，こうした点を考察すべく，陶工とフリントガラス製造工の移民を具体的にみていくことにしよう。

II　陶工の移民

「陶工全国組合」National Union of Operative Potters の創立は，1831年8月であるが，この組合が移民に積極的にとり組み，「陶工株式移民協会および貯蓄基金」'Potters' Joint-Stock Emigration Society and Savings Fund' の設立を決定したのは1844年2月，実際に設立されたのは同年5月であった。移民基金を設定した労働組合としては，最も早い時期に属する[10]。この移民計画を作成し，強力に推進したのは，陶工組合の機関誌『ポッターズ・エグザミナー』*Potters' Examiner* の編集者ウィリアム・エヴァンズ William Evans である。1841年以降，イリノイ，オハイオ，ウィスコンシンに移住し成功した陶工等の手紙が，イングランドにおける陶業の中心地スタッフォードシャーのポタリーズ地方で回覧されはじめるが，エヴァンズはこの種の手紙を，1843年12月以降，『ポッターズ・エグザミナー』誌上に連続的に掲載したのである。1843年5月13日号に掲載された靴工からの手紙は，「ここはイングランドとは違う。かれらは人を服装や外観で尊敬しはしない。かれらは人の行動をみる。もし正直な人だったら尊敬される！　かれらは真に民主主義者だ！」[11]と書かれたものである。

1844年2月3日の『ポッターズ・エグザミナー』には，移民を奨励する最初の論説が載る。筆者エヴァンズは，かれの主張の根拠を需給説に求めている。「労働の価格は，現存の社会秩序のもとでは，需要と供給によって規定されているし，今後もそうされるであろうことは，いまやブリテンの国民の全階級の共通理解になっている主題である。供給が小で需要が大であるならば，労働は価値と価格を増加させるにちがいない。しかし，もし反対に供給が大で需要が小であるならば，労働は価値と価格を減少させるにちがいない。それ故，働く陶工たる我々にとって，過剰労働 surplus labour，即ち失業者 unemployed hands を，ブリテンの産業の陶業部門から除去するためのよく練られた実際的計画は，極めて重要である」。そして，移民のための土地購入を提起している。「協会がイングランドで土地を借用する代りに，アメリカの土地を購入すべきである。私の見解では，移民費用を含めても，この国の高い土地を借用するよりも，それはヨリ容易で効率的であろう。……イングランドでは最劣等地の平均価格は，1エーカー当り30ポンドから60ポンドであるが，アメリカ西部諸州では，最優良地で1エーカー当り60ペンスであり！　そして自由保有である!!」[12]。

この「移民協会」が対象とした移民は，陶工とその家族に厳格に限られていた。「協会」への入会金は，1ポンド1シリング6ペンスであり，会費は，週1シリング6ペンスであった。その他，協会規約や会員証発行のために1シリングが追加された。計画は，1株1ポンドの株を5,000株発行し，その資金5,000ポンドで1万2000エーカーの土地を購入し，100家族，すなわち1家族3人の成人と2人の未成人計5人として500人の移民費用とするものであった。1株の1ポンドは，1週1シリングづつ20週の週賦が認められていた。当時，陶業の中心地ポタリーズ地方には約7,000人の陶工がおり，そのうち約600人が失業していたが，エヴァンズは，この計画が実現すれば，「少なくともポタリーズ地方の失業者の半数が吸収され，残りの陶工たちはかれらの労働に対する道理にかなった価格を要求するのにヨリ良い状況に置かれるだろう」[13]と主張していた。情熱は燃え，夢は遠大であった。それは，1家族当り20エーカーの土地を100家族に計2,000エーカー

10)　S. & B. Webb, *op. cit.*, p. 202, fn. 1, 訳(上), 230ページ, 注34), および, J. Ginswick, ed., *Labour and the Poor in England and Wales, 1849–51, The Letters to Morning Chronicle*, vol. II, 1983, p. 129. なお，陶工の移民については，Harold Owen, *The Staffordshire Potter*, 1901, chapters IV, V も叙述しているし，Shepperson, "Industrial Emigration," pp. 184–88 も触れている。

11)　*Potters' Examiner and Workman's Advocate*, Jan. 20, 1844.

12)　*Potters' Examiner*, Feb. 3, 1844.

13)　*Potters' Examiner*, Feb. 3, 1844.

与え，残り1万エーカーを「移民協会」が所有し，都市化による土地価格の騰貴を待つという計画であった。一株を所有した移住者は，20エーカーの土地の占有権を持つだけだが，5ポンド10シリングを「移民協会」に支払えば，その土地の永久所有権をもつとされていた[14]。それを「ここには失業者にとって何とすばらしい土地があるのだろうか」と書いて，『ポッターズ・エグザミナー』は移民を奨励したのである。

こうして1845年末までに資金を準備し，「移民協会」の役員3人がアメリカに土地購入の先遣隊として行くことになった。当初，土地購入の関心はイリノイに集中したが，結局ウィスコンシンを定住地とすることになり，先遣隊はポーテイジ Portage(のちにコロンビア州になる)近くのフォックス・リヴァー Fox River で土地購入に成功し，そこをポッタースヴィル Pottersville と命名した。

注意すべきは，かれらは陶工としてではなく，陶工を辞めて農業移民として入植したという点である。それをうながした要因として，まず，エヴァンズが『ポッターズ・エグザミナー』誌上で繰り返し移民の効用を訴えつづけたことが挙げられる。1836年-37年の争議が，陶工組合の組合員たちにストライキ反対の考えを抱かせており，1845年3月には陶工組合全国会議の代表がストライキ反対の見解を明確に表明するまでになる[15]が，陶工たちはストライキに代る賃金引き上げ，労働条件改善の手段として移民を捉えたのである。

農業移民としての移住を促した第2の要因として，機械導入の脅威が挙げられよう。陶工組合は，機械の導入にたいし，それが伝統的手労働による熟練技術(スキル)を無価値にし，さらに失業者を生みだすものとして鋭く反発した。1844年7月20日付の『ポッターズ・エグザミナー』は，つぎのように機械化について警告している。「組合組織の強弱は，失業者数に完全に依存する。もし失業者数が大であるならば，いかなる団結も組合に力を与えることはできないが，しかし，反対に失業者数が小さければ，団結がなくとも，結果として力をもたらすだろう。手織工と紡績工が社会的破滅と貧窮の最低可能な程度にまで低下したのは，機械の導入に起因する大量の失業のためである。……移民会社は組合の『巨大な安全弁』である」。陶業では，1844年夏のJ.リッジウェイによるこね土をつくる機械の導入と同年10月のC.J.メイスンによる皿と受け皿をつくる機械の導入が陶工に脅威を与えたとき，組合は反発しこの機械の使用を数週間で止めさせた。「職工たちの意志強固な反対が，機械自体に欠陥があったこともあって，メイスン氏に数週間の試行の後，それを廃棄させた」[16]のである。翌1845年1月には，数百人の陶工たちが機械導入に反対し，雇用者も機械を導入するには労働者の反対を覚悟せざるをえず，その抵抗に脅威を感じるまでになった[17]。当時現役で働いていた陶工は，後年の回想録のなかで，「数人の大規模な雇用者でさえ，まるで幽霊から逃れるごとく，機械の導入から逃れた」[18]と記している。こうして陶業では，プリント・ローラーが1850年代に広範に使用されたのを除くと，機械化はその後も著しく遅れ，伝統的手労働に依拠しつづけるのである。1890年に至ってもなお機械化は制限されたものであり，工場監督官報告書が，「今まで大多数の陶器製造業者は蒸気力を使用しない」[19]と書いているほどである。機械化の地域的差異をみてみると，グラスゴーやニューカッスル・アポン・タインのような陶業の後発地域の方が，伝統的な陶業の中心地ポタリーズ地方よりも機械導入のテンポは速い傾向があったことがわかる。これは，ポタリーズ地方の熟練陶工は，労働貴族意識を他の地方よりヨリ強く有し

14) Ginswick, ed., *Labour and the Poor*, vol. II, p. 131.

15) *Northern Star*, March 29, 1845.

16) *Potters' Examiner*, Dec. 14, 1844.

17) *Potters' Examiner*, Jan. 25, 1845.

18) Old Potter, *When I was a Child*, 1903, p. 186, quoted in W. H. Warburton, *The History of Trade Union Organisation in the North Staffordshire Potteries*, 1931, p. 116.

19) Parliamentary Papers, 1889 (5697) XVIII, p. 90, quoted in R. Samuel, "The Workshop of the World," *History Workshop*, III, 1977, p. 34.

ており，機械化に激しく抵抗したからに他ならない[20]。機械の導入が，同時代の技術水準によってだけでなく，労働者，とくに熟練労働者の反発・抵抗いかんにも依存していた点は，クラフト・コントロールが労働組合によってある程度なされていたヴィクトリア期イングランドの労働史を考察するときに，とりわけ重要である。しかし，クラフト・コントロールは常に絶対的に行使されていたわけではなく，むしろ新機械の導入は熟練工の特権的地位を崩壊させる可能性を絶えずもっていた。『北スタッフォードシャー・ポタリーズにおける労働組合組織の歴史』の著者 W. H. ウォーバートンは，1844 年の機械導入と移民の関連について，「これらの人々(陶工たち)は，かれら自身が将来，手織工と同じ状態になることを知り，過剰労働の害悪がかれらにとってヨリ現実的な問題となった。この害悪の救済手段としての移民にたいする信念は，活動的になり，情熱をもってかれらはその課題を推進する目的で設立された(移民)協会を信頼した。この機械の恐怖が生じなかったならば，おそらくこの組合は順調に存続し，1850 年代の『新型』組合に到達しただろう」[21]と書いたが，このなかに農業移民として入植した陶工の心性が鮮かに描かれている。

農業移民としての入植を促した第 3 の要因は，陶工たちの土地取得の願望が大きかったことであろう。陶工が「移民協会」を設立した 1844 年は，43 年から「冬の時代」に入ったチャーティストたちが「土地計画」を推進していた時期である。チャーティズムの指導者 F. オコナー Feargus O'Connor の提唱により，労働者から集めた資金で土地を購入し，5,000 家族を入植させようとする計画は一部実行に移され，1845 年 3 月にロンドンから 16 マイル離れたヘリングスゲイトに 103 エーカーの土地を購入し，35 名が入植した。この村はオコナーヴィルと命名された。ガメイジ，ホーヴェル等のチャーティズム研究者は，さらには，サヴィル等戦後のマルクス主義史家もこぞってこの「土地計画」を「反動的」「後ろ向き」「小ブルジョア的」とし，「人民憲章の要求を土地獲得に矮小化し」(ドレアン)，チャーティズムを崩壊に導いたとしてきたが，マッカスキルの研究(1960 年)は，土地計画が南部農業地域で強い支持があり，北部労働者のうしろむきの運動とは捉えられないという新しい視点をうちだした[22]。もちろん，マッカスキルの「中産階級史観」をそのまま受容することはできないが，同時代の人々が土地取得にたいして強い願望を抱いていたことを労働者の農民化としてだけ捉えて，「後ろ向き」の計画として裁断することに異議申し立てをした点は評価すべきであろう。エンゲルスも「チャーティストの農業綱領」(1847 年 11 月)ではオコナーの土地計画を支持していたのである。

このチャーティズムの「土地計画」は，陶工の移民計画と土地を与えて入植させるという点では共通性があったが，入植先が国内であるか国外であるかという点で相異しており，オコナーは「陶工移民協会」を批判した(1844 年 8 月 19 日)。オコナーが「祖国を離れるのは真の愛国者ではない。留まって諸君の主張を実現せよ」と批判したのにたいし，エヴァンズは，ただちに同年 8 月 31 日に『ポッターズ・エグザミナー』誌上で反論し，「もしヨリ善なることが国内に留まるよりもアメリカに行って実現されるならば，その善をなすことが真の愛国主義である。もし国を離れる資金をもっているのに，国内に留まって飢える人は，分別がなく正気ではないのである。なぜなら，かれは偶々その国に生まれたに過ぎないからである」と主張した。そして，エヴァンズは，「陶工組合の主要な障害は，この帝国の高価で重税が課せられる土地に国内植民する手段よりも，北アメリカの自由で安価な土地への移民計画によって，ヨリ容易に継続的に除去される」[23]と主張し，その理由を具体的に列挙している。すなわち，第 1 に，アメリカの土地価格がイングランドの 200 分の 1

20) *Ibid.*, p. 34.

21) Warburton, *op. cit.*, p. 115.

22) J. MacAskill, "The Chartist Land Plan," in Asa Briggs, ed., *Chartist Studies*, 1960.「土地計画」については，古賀秀男『チャーティスト運動の研究』ミネルヴァ書房，1975 年，第 4 章，および，A. M. Hadfield, *The Chartist Land Company*, 1970 を参照した。

23) *Potters' Examiner*, Aug. 31, 1844.

であること，第2に，アメリカの土地への課税は，イングランドの120分の1以下であること，第3に，過剰労働者をイングランドの農村に移住させることは，農業労働者を過剰とし，結局，農業から工業へと移動する結果にならざるをえないこと，第4に，イングランドの農村へ入植しても，依然として古い雇用主のもとで雇われるだけに終ることを挙げている[24]。

しかしながら，チャーティズムの「土地計画」が1840年代末には挫折したのと軌を一にして，陶工の移民も挫折した。1848年の不況は「移民協会」への会費納入の遅滞を生じさせ，同時に，ポッタースヴィルも満足できる状態にないとの報告が出はじめ，移民熱は下降した。土地の地味が貧しいことや開拓の厳しい条件にたいして不満が生じ，このような類の報告を打ち消すために，1849年-50年に「移民協会」はアメリカより移民周旋人を1人イングランドに帰国させ，各地を演説して廻らせなければならなかった。1850年6月，ついにポッタースヴィルの移住者が『グレイト・ブリテンの人々へ』'To the People of Great Britain' という陳情書を出し，一連の不平不満を書いたとき，陶工の移民計画の失敗が明白になった。ポッタースヴィルはスコット Scott と名称を変える。実際に移民した陶工の数は明確にはなっていないが，1849年初めのポッタースヴィルに134人の移民がいたという記述があるし[25]，1860年にはイギリス人戸主83人のうち76人が農民であったという記録もある(1860年センサス)[26]。

24) *Ibid.*

25) Ginswick, ed., *Labour and the Poor*, vol. II, p. 130.

26) G. フォアマンは，ポッタースヴィルの失敗は，「組織者が知識と資本に欠けていたからである。ウィスコンシンの陶工たちは，他所のブリテンのアルティザンと同様に，開拓の条件に容易に適応できなかったのである」と指摘している。だが，少なくとも2人の移民した陶工が，オハイオのイースト・リヴァプールで陶業製造業者として大成功したと書いている(Grant Foreman, "The Settlement of English Potters in Wisconsin," *Wisconsin Magazine of History*, XXI, 1937-8, quoted in F. Thistlethwaite, "The Atlantic Migration of the Pottery Industry," *Economic History Review*, sec. ser., XI, 1958, p. 271)。

III フリントガラス製造工の移民

フリントガラスとは鉛ガラスないしクリスタルガラスのことで，その製造には高度の熟練を要するものである。フリントガラスの起源は17世紀初めにさかのぼるが，19世紀中葉にはミッドランドに生産が集中し，とくにバーミンガムの西数マイルに位置するスタウアブリッジが最高級のフリントガラス製品を生産するようになっており，そこには約1,000名のガラス産業労働者がいたが，そのうちガラス製造工は384名(1861年センサス)であった。フリントガラス製造工は1844年に「強力な」労働組合を組織するが，1848年-49年のバーミンガムでのストライキの結果解体し，1849年9月「フリントガラス製造工友愛組合」Flint Glass Makers Friendly Society を再建した。この組合は，ウェッブが，合同機械工組合 A. S. E. と並んで「新型組合」の典型とみなした，イングランド，スコットランド，アイルランドのガラス生産地に20余の支部をもつ全国組織の労働組合である。組合員は1850年代初めは約1,000名，1880年には2,000名に増加するが，A. S. E. などに比較すれば規模の小さい組合であった[27]。

移民計画は，たしかに1850年代初めには，この組合の重要政策の1つであった。1849年の組合再建後ただちに「移民委員会」の設置が決議され，「6ヵ月間にわたって，必要ならばヨリ長い期間にわたって，毎月6名づつの割合で過剰な働き手 surplus hands を合衆国に送ること」[28]が目的とされた。そして，少なくとも1850年代初めには，この移民計画は古典派経済学の需給説に依拠して作成されたようにみえる。組合機関誌『フリント・ガラス・メイカーズ・マガジン』*Flint Glass Makers Magazine* は，1854年に「最終的手段としての移民」と題する巻頭論文を載せ，「労働者が稀少であることは，我々の労働の価格を決

27) フリントガラス製造工とその労働組合については，T. Matsumura, *The Labour Aristocracy Revisited, The Victorian Flint Glass Makers, 1850-1880*, 1983, M. U. P. を参照されたい。ただし，この書では移民にかんする部分は割愛してある。

28) *Morning Chronicle*, Dec. 23, 1850.

定する重要な点である」と指摘したのち，つぎのように主張している。

「労働過剰の害悪を避け，いかにして好況期を最もよく利用すべきかに組合員の眼を向けさせることが，組合の目的となるべきであると我々は考える。これだけの前置きをして，好況期と不況期の均衡を回復する手段として移民のことを述べよう。移民は我々の主張したことを実現するだろう。移民に1,000ポンド費して過剰労働を完全に回避することは，失業者に1,000ポンド費すよりもはるかによい。無節操な製造業者がその産業を独占したい欲望から我々に課する全てのことに我々を服従させるために，不況期に鞭として使うべく失業者を家庭においておくより，はるかによいのである」[29]。

この主張は，移民を極めて熱心に推進した組合初代中央書記 W. ギリンダー William Gillinder によってなされたものであるが，かれが組合機関誌を使って連続的に移民推進の論稿を発表し，組合員の移民についての考え方に一定の影響を与えた点では，陶工組合のエヴァンズと共通していた。ギリンダーの計画によれば，その1,000ポンドで毎年50名づつ，すなわち1人当り20ポンドづつ支払い，オーストラリアに移民させることになっていた[30]。

ギリンダー自身は1854年中央書記を辞めてアメリカに家族とともに移民するが，その年の9月8日，バーミンガムのオッドフェロウズ・ホールで開かれたギリンダーの送別会の状況は，当時の組合員の移民にたいする心性をよく表現している。そこに集まった約200人のフリントガラス工とその妻たちは，口々にギリンダーのアメリカ移民の決心を称賛した。グラスゴウから参加したガラス製造工ベンジャミン・スマートは，「ギリンダー氏は常に強く移民を擁護してきた。そして，いまやかれがその手本を示そうとしている。かれ自身，移民が過剰労働を減少させる最良の方策とみなしていたのである」[31]と演説した。バーミンガム選出の急進派議員ショウフィールドも，「移民の問題にかんして，私が言わなければならないことは，つぎのことである。ギリンダー氏のアメリカ行やニクソン氏のオーストラリア行に例をみるごとく，フリントガラス製造工たちは遠く離れた国々に行くのだが(喝采)，もしバーミンガムの全ての組合がこのような使者を送ることができるならば，これらの諸国にとっても，かれらの所属する産業にとっても，最善のことをすることになろう」[32]。

しかし，ギリンダー自身がガラス産業の過剰労働減少のために移民したとみるのは早計であろう。かれは移民して7年後の1861年にフィラデルフィアに「フランクリンガラス会社」を設立し，さらに1863年にプレス・ガラスの製造を開始している。そして，1865年には新型のブロウ・パイプの特許をとるが，熟練を必要としないこのパイプの発明により，アメリカのガラス生産は画期的変更をもたらしたといわれている[33]。ギリンダーは移民前にはプレス・ガラスの製造に断固反対した人物であった点は重要である。プレス・ガラスは1820年代にアメリカで発明されたものであるが，鉛を含まずそれ故光沢に乏しいが，機械でプレスするため安価に製造でき，間もなくイングランドでも製造が開始された。しかしながら，スタウアブリッジやバーミンガムなど，西ミッドランドでは，プレス・ガラスの導入は熟練ガラス製造工の地位をおびやかすものとして激しい抵抗にあった。1848年7月にはバーミンガムのファイヴウェイズ・フリントガラス工場で，プレス・ガラス導入が原因で100名のストライキが生じ，翌年3月まで続いている。ストライキは組合の敗北に終ったが，プレス・ガラスは西ミッドランドで定着できず，ニューカッスル地方で製造されるようになる。一方には熟練を必要とする吹きガラスと，他方では余り熟練を必要としないプレス・ガラスというような，地域別に特化した二重の市場構造が，19世紀中葉には形成されたのである。ニュ

29) *Flint Glass Makers Magazine*, II, p. 1.
30) *Ibid.*, II, p. 2.
31) *Ibid.*, II, p. 101.
32) *Ibid.*, II, p. 104.
33) A. C. Revi, *American Pressed Glass and Figure Bottles*, 1964, pp. 10–11, 163, and MacKearin, *American Glass*, p. 610.

ーカッスル近郊のゲイツヘッドで，ネヴィルが1850年代初めにプレス・ガラスを製造したとき，熟練ガラス工の立場からネヴィルを「無節操な製造業者」だと激しく非難したのは，他ならぬギリンダーだった。かれが1871年に59歳で死亡したときの追悼記事の表現を使えば，「筋金入りの労働組合家」'staunch trade's unionist' が，移民後，「尊敬すべき良き雇用者」[34]'honourable and good employer' になったのであるが，これは移民による労働貴族の社会的上昇を示す一例である。しかし，このような例は他にほとんどなかったことも付言しておかねばならない。

しかしながら，ギリンダーとは対照的な移民に消極的ないし否定的見解が，すでに1850年代初めでさえフリントガラス製造工のあいだにみられたことに注目する必要があろう。この人々は，第1に，移民が過剰労働を減少させるとする主張に疑義を呈し，移民に組合基金を費すよりも，基金をさらに蓄積すべきであると主張した。たしかに，移民計画が労働の需給説に基づいて有効に実行されるためには，当該産業への不熟練労働者の参入を阻止しなければならない。1852年に，フリントガラス製造工組合中央委員会でさえ，「一見すると移民大計画にみられる我々の考えは，最良の計画である。しかし，失業者名簿をみてみると，現在の移民は，新しく年少者たちがこの産業に参入する余地をつくるにすぎない，という結論に我々は達した」[35]と言明していた。また，ある組合員は，1852年につぎのような提案をした。

「それ(移民にかんする規約)は，ヨリ緊急な諸目的のために我々の基金を節約するという見地から，早急に産業全体で検討されねばならない。なぜならば，現在我々の組合員の移民は，移民する個々人の利益にはなるかもしれないが，我々の主要目標である産業の利益にはなりえないからである。というのは，成人(のガラス製造工)をこの国で雇えないならば，(残りの)3人で一定時間働くことが期待できないとき，移民は徒弟の育成を促進するだけであろう。かれらは3人1組で働かねばならなくなるか，徒弟を1人雇わねばならなくなるだろう」[36]。この主張には若干の注釈が必要だろう。当時フリントガラス製造工は，4人で構成される「チェアー」と称されるグループで生産に従事しており，その4つの職階は，上からワークマン(親方)，サーヴィター，フットメイカー，テイカー・イン(児童)と呼ばれていた。熟練度は職階により順次異なり，1人が欠けることは，作業上重要な支障をきたすことであった。徒弟はテイカー・インを3年間以上勤めてから7年間修業し，その後ジャーニーマンになるが，徒弟規制は労働組合によって厳格に実施されていた。それ故，移民することにより1人欠けることは作業の進行を阻害するのであり，徒弟雇用を増加させるならば，組合の最も重要な政策を崩すことにもなりかねなかったのである。

移民否定論の第2の理由は，移民したガラス製造工が定住に成功せず，再びイギリスに帰国するという問題であった。ギリンダーも指摘したように，「移民の幾人かは，間もなく『ホーム・シック』にかかった。約2ヵ月滞在したのち，かれらは戻ってきて，まるで聖書のなかのスパイのように悪い報告を持ち帰った」[37]ということも生じたのである。このフリントガラス製造工のあいだにみられた否定的見解は，ウェッブによって無視された。シドニーは，『フリント・ガラス・メイカーズ・マガジン』から書き抜いた256頁のノートでは，「移民計画は……失敗である」[38]とした個所を書き留めたが，『労働組合の歴史』や『産業民主制』を書いたときには，この個所を無視し，フリントガラス製造工組合を積極的に移民を推進する見解をもつ代表的組合として描いたのである。

では，フリントガラス製造工は，実際どれだけ移民したのだろうか。つぎにこの点を検討しよう。『フリント・ガラス・メイカーズ・マガジン』は年4回づつ刊行され，各支部からの本部宛会計報

34) *Flint Glass Makers Magazine*, VI, p. 1085.
35) *Ibid.*, I, p. 340.
36) *Ibid.*, I, p. 342.
37) *Ibid.*, II, p. 109.
38) S. Webb, *Flint Glass Makers*, 256 pp. (Notebooks in the Webb Trade Union Collection at the British Library of Political and Economic Science, L. S. E. (Section A, vol. XLIV), p. 232.

第1表　フリントガラス製造工の移民数(1852年-81年)

年	移民数	アメリカ行	オーストラリア行	行先不明
1852	3	3	0	0
53	5	3	0	2
54	5	3	0	2
55	1	1	0	0
56	10	0	0	10
57	0	0	0	0
58	0	0	0	0
59	0	0	0	0
1860	1	0	0	1
61	0	0	0	0
62	1	0	0	1
63	3	0	0	3
64	1	0	0	1
65	0	0	0	0
66	0	0	0	0
67	1	1	0	0
68	0	0	0	0
69	5	1	4	0
1870	6	1	5	0
71	0	0	0	0
72	0	0	0	0
73	0	0	0	0
74	0	0	0	0
75	0	0	0	0
76	0	0	0	0
77	1	1	0	0
78	1	1	0	0
79	11	9	2	0
1880	4	4	0	0
81	0	0	0	0
合計	59	28	11	20

備考)　*Flint Glass Makers Magazine*, I-IX に記載されているフリントガラス製造工友愛組合四半期報告(支部別)より集計したもの。

告も載せているので，そのなかの支出項目の移民費をトレースできる(第1表)。それによると，1852年から56年までの移民数は計24名であり，その後の10年間はわずか6名にすぎず，かれらのストライキがあった1858年-59年には，移民したものはいない。これはストライキによる組合基金の減少が移民費を支払うことを不可能にしたことと，ストライキ中に示されたガラス製造工たちの団結の強さによる。総じて1850年代は移民にかんする議論は組合機関誌上で盛んに行なわれたが，実際に移民した数は微々たるものであった。

移民数が再び上昇するのは，ようやく1860年代後半になってからである。だが，移民先はこの間に，アメリカからオーストラリアへと変わっている。この変化は1868年-69年に組合中央委員会がアメリカにおける不況のため，そこへの移民を制限したことによるものだろう。1868年3月，中央委員会は組合員宛につぎのような通達をだしている。「組合はニューヨークでは解体し，人々が次々に受ける被害の規模は大きい。カストプレイスの労働者の賃金は45ドルから38ドルへ，さらに30ドルへと減少し，かれらは月曜の朝から土曜の夕方まで働かなければならないし，受け取る賃金もそれほど多額ではない。イングランドで仕事をもっているものへの私の忠告は，諸君は現在いるところに留まるように，ということである」[39]。アメリカへの移民制限に代って，中央委員会はオーストラリア移民を奨励した。アメリカ行移民には6ポンド10シリングの資金援助をしたのにたいし，オーストラリア行移民には10ポンド10シリングと，援助額に格差をつけたのである。中央委員会が1869年6月に移民先によるこの援助資金格差の設定を提案したとき，つぎのような背景説明をしている。「偉大なアメリカでさえ，我々アルティザン階級は多少過剰になってきた。我々は当地の我々の友人たちから，この12ヵ月間，不況について多くの不満をきいた。オーストラリアでははるかに明るい展望があり，産業は今やその地で地歩を固めたようにみえるので，我々はアメリカ行の援助額を低くし，オーストラリアへ出ていかせるために増額の刺激を与えることを提案する」[40]。この中央委員会提案は翌7月，全組合員の投票にかけられ，賛成1,219，反対368で可決された。実際には，この提案以前の1868年3月，中央委員会はアメリカ行移民希望者10名にたいする資金援助を拒否していたし，翌1869年3月にも同様の移民希望者数人への資金援助を拒否していた[41]。このような政策の結果，1869年と70年に，アメリカへ移民したフリントガラス製造工数は1名づつであったのにたいし，オーストラリアへは1869年4名と70年5名に増

39)　*Flint Glass Makers Magazine*, VI, p. 258.
40)　*Ibid.*, VI, p. 646.
41)　*Ibid.*, VI, pp. 258, 586.

加する（第1表）。そして，移民した組合員は，もし本人が希望するならば，年間10シリングの組合費を払うことによって名誉組合員になれるとされた。しかし，退職給付も死亡給付もこのような組合員には支払われないことになっており，フリントガラス製造工のばあいは移民後の名誉組合員は名目的なものにとどまったのであり，この点は機械工や石工や鋳型工とは異なっていた。合同機械工組合 A. S. E. のばあいには，1850年以降，組合費を納入すれば埋葬給付と災害給付を受けることができ，さらに1857年以降は国外に組合支部ができ，そこから共済給付が受けられるようになっていた[42]。

移民数は1870年代前半期には再び減少する。1870年から77年までの『フリント・ガラス・メイカーズ・マガジン』誌上から，移民にかんする論説はほとんど消えてしまっており，数少ない論説も，例えば1874年11月の巻頭論説のように，「外国で生活するように人々を駆りたてるのは，大きな誤りである」[43]と断言する類のものであった。

1877年，ガラス産業も不況に襲われると移民数は再び増加する（第1表）。不況はヨーロッパ大陸からの安価なガラス製品の輸入によって深刻化し，伝統的技術で高級フリントガラスを製造していたスタウアブリッジよりも，マンチェスターなど急成長をとげていた地域でとくに打撃が大きかった。1850年頃よりフリントガラスでも開始された「黄金時代」は，ここに終ったのである。1879年には，11名が移民し，その大部分がアメリカ行であった点は注目されよう。不況の到来による失業がこの期の移民促進の主要因であったことは，1877年から80年のあいだに移民した17名のうち8名が失業者であった（雇用されていたもの6名，残り3名は不明）ことから明らかである。その8名の失業者の失業期間は，各々63週（サーヴィター），58週（ワークマン），58週（メルター），38週（サーヴィター），26週（ワークマン），17週（サーヴィター），52週（職階不明），9週（職階不明）であったこと[44]から，かれらは熟練工でありかなり長期間にわたり失業していたものが多いことが分る。

第2表　フリントガラス製造工移民の出身支部（1852年-81年）

支　　部	移　民　数
マンチェスター	13　名
バーミンガム	11
グラスゴウ	8
ベルファースト	5
セントヘレンス	4
スタウアブリッジ	3
ロンドン	2
ハンスレット	2
ダドリー	2
ヨーク	1
ニューカッスル	1
ダブリン	1
シェルトン	1
キルンハースト	1
ボールトン	1
エディンバラ	1
ニュートン	1
ウァリントン	1
合　　計	59

備考）出典は第1表と同じ。

ここで，移民数と失業との関連を1850年以降までに拡げてみてみると，移民数の多かった1856年，63年，69年-70年は，いずれも失業の悪化した1855年-56年，61年-62年，69年-70年の直後に生じていることが明らかとなる。移民の現実の動因は失業からの脱出が強く作用していたことは間違いないだろう。移民の出身支部をみると，このことはいっそう明らかとなる（第2表）。1852年から81年の間の出身支部は，マンチェスターが13名，バーミンガムが11名，グラスゴウが8名であるが，スタウアブリッジはわずか3名にすぎない。とくに不況期の1877年から80年には，マンチェスターから7名であるのにたいし，スタウアブリッジから移民したものは零である。これは前述したごとく，不況がスタウアブリッジより

42) Erickson, "The Encouragement of Emigration," p. 267, fn. 2.

43) *Flint Glass Makers Magazine*, VIII, p. 4.

44) *Flint Glass Makers Magazine* 誌に載る年4回の財政報告を使用し，移民者の氏名と週毎に支払われる失業給付受給者の氏名をトレースして作成した数字。

マンチェスターのガラス産業をより激しく襲ったからである。

総じて19世紀第3四半期に実際に移民したフリントガラス製造工は極めて少数であったし，移民援助資金額の総計も少額であった。移民に熱心であった鋳鉄工組合が，1855年と74年のあいだに4,712ポンドの移民援助を支出したのにたいし，フリントガラス製造工組合のばあいは，1852年と74年のあいだに306ポンドを支出したにすぎなかった[45]。

IV　結びに代えて

以上の検討から，ウェッブのように，陶工やフリントガラス製造工の組合機関誌から移民計画を熱心に説く論説を引用して(あるばあいは移民否定の論説は無視して)，移民を促進した組合であるかのように描くのは正しくないことが明らかであろう。ウェッブは，また，実際の移民数も数えなかったのである。であるならば，1880年代の不況到来まで労働組合は移民を積極的に推進したとして，ウェッブより長い期間を設定したエリックスンの誤りもまた明らかであろう。フリントガラス製造工にかんしていえば，エリックスンは，この組合を移民資金援助額に移民先によって格差をつけた典型例とみなしている。この1869年に設定された格差については前述したところだが，エリックスンによれば，「オーストラリアへのヨリ高い船賃を考えれば，この種の規約は合衆国への移民に不利益になるようには作用しなかった」[46]。つまり，アメリカへの移民は依然として続いていたにちがいないと推測するのである。だが，この誤った推測は，エリックスンが，フリントガラス製造工組合の1879年規則と規約(第3版)しか使えず，『フリント・ガラス・メイカーズ・マガジン』を利用できなかったために，援助金格差設定の理由も実際に1869年，1870年両年にオーストラリア行移民数が計9名であったのにたいし，アメリカ行移民数は計2名であったことも認識しえなかったという資料上の制約から生じただけではない。ウェッブの誤った前提にたっていたからでもある。

ウェッブは，移民が古典派経済学の需給説に依拠して行なった労働組合の重要政策の1つであると強調したが，この強調は正当ではないのである。移民した組合員は，失業からの脱出や新事業の起業を動機に移住し，本人にはアメリカやオーストラリアでの社会的階層上昇を成しとげる機会ではあったが，それは移民が需給説を受容したことではなかった。この点にかんしては，クレメンツの主張が正しいのであって，移民はけっしてイングランドに残った同業者の労働条件・生活条件を改善することにはならなかった。また，組合が支給した1人当りの移民援助金も，それだけで移民を促進するような高い額ではなかったし，その意味では，移民支出費も組合財政状況が良好なときのみ支払われる傾向があった。このように賃金基金説にもとづいて移民が実施されたと主張することはかなり困難である。

それどころか，W. H. フレイザーの研究は，組合の指導者たちが移民に熱心であったのは，他の経済的利害に直接結びついた理由によることを明らかにしている。スコットランドの急進主義的新聞『グラスゴウ・センティネル』*Glasgow Sentinel*の編集者であり，フリントガラス製造工組合の名誉組合員でもあったアレクサンダー・キャムベルは，グラスゴウ・トレイド・カウンシルに移民問題をとりあげ，移民にたいする政府援助資金を要請するよう説得した人物であるが，かれは「カナダ土地・鉄道投資協会」Canadian Land and Railway Investment Associationの書記であり，のちにノーヴァ・スコティアの政府移民代理人であった。炭鉱労働組合の指導者アレクサンダー・マクドナルドも移民を奨励したが，かれは「ヴァージニアのハムプシャー・バルティモア石炭会社」Hampshire and Baltimore Coal Co.の労働供給代理人としても行動した。かのジョージ・ポッターも，1970年以降は，「全国移民連盟」National

45)　鋳鉄工組合の移民費総計は，Webb, *History of Trade Unionism*, p. 202, fn. 1, 訳(上)，230ページ，注(34)による。フリントガラス製造工組合のそれは，上記の年4回の財政報告より集計したもの。

46)　Erickson, "The Encouragement of Emigration," p. 264.

Emigration League の有給書記であった[47]。

賃金基金説自体も変更を余儀なくされた。1848年ミルの『経済学原理』で表明された賃金基金説は，二流三流のエコノミストによって俗流化され，当初は労働組合の機関誌もその説を主張するものもあった。たとえば，合同機械工組合(1854年)や前述したフリントガラス製造工組合(1850年代初め)である。しかし，労働組合の現実の賃金引き上げ闘争のなかで賃金基金説の誤りは経験的に知覚され，1860年代に入ると組合機関誌が賃金基金説批判の記事を載せはじめる。たとえば，『ブリックレイヤーズ・トレイド・サーキュラー』*Bricklayers' Trade Circular*(1861年)や『ビー・ハイヴ』*Bee-Hive*(1862年)や『フリント・ガラス・メイカーズ・マガジン』(1860年代)である。それはやがて二流三流のエコノミストの採用するところとなり，1866年にF. D. ロンジェが，さらに1869年にW. T. ソーントンがミル批判を行ない，ついにミル自身が賃金基金説を修正せざるをえなくなり，賃金率の上限と下限は賃金基金によってあらかじめ決まっているものの，その間に決定する賃金率は労資の力関係によるとしたのである[48]。このように巨匠の経済学説が，労働組合運動を濾過することによって修正されていく過程は，労働者がミドル・クラスの学説を一方的に受容しなかったことを意味している。労働者は自らの労働と生活の場における「経験」に根拠をもつ独自の「文化」を有していたのであって，ミドル・クラスの思想や学説も，その経験に照らして必要なときに利用したにすぎない。労働組合の移民もまた，ミドル・クラスの思想や学説に依拠して実行されたことはなかったのである。

(慶応義塾大学経済学部)

47) W. H. Fraser, *Trade Unions and Society*, 1974, p. 173.

48) *Ibid.*, pp. 175–78.